



TITLE:

## 尿管内反性乳頭腫の1例

AUTHOR(S):

蓮見, 壽史; 杵尾, 泰洋; 佐野, 克行; 三浦, 克敏

---

CITATION:

蓮見, 壽史 ...[et al]. 尿管内反性乳頭腫の1例. 泌尿器科紀要 2002, 48(3): 171-173

ISSUE DATE:

2002-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/114711>

RIGHT:

## 尿管内反性乳頭腫の1例

町立浜岡総合病院泌尿器科 (科長: 佐野克行)

蓮見 壽史, 杵尾 泰洋, 佐野 克行

浜松医大病院病理科 (主任: 三浦克敏助教授)

三 浦 克 敏

## URETERAL INVERTED PAPILLOMA: A CASE REPORT

Hisashi HASUMI, Yasuhiro MOKUO and Katsuyuki SANO

From the Department of Urology, Hamaoka Municipal Hospital

Katsutoshi MIURA

From the Department of Pathology, Hamamatsu Medical University

A 43-year-old man presented with left hydronephrosis, incidentally found by ultrasonography. He had undergone transurethral bladder tumor resection when he was 29 years old. Cystoscopy revealed a tumor protruding from the left ureteral orifice. Left partial ureterectomy was performed, and its histopathological diagnosis was ureteral inverted papilloma. He has remained free of disease for 18 months after the surgery.

(Acta Urol. Jpn. 48 : 171-173, 2002)

**Key words:** Ureter, Inverted papilloma

## 緒 言

内反性増殖を呈する尿路腫瘍のうち、良性腫瘍とされる内反性乳頭腫は、ほとんどが膀胱に発生したものであり、上部尿路における報告はわれわれの調べたかぎり諸外国を合わせても30例と少ない。今回われわれは尿管に発生した内反性乳頭腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

## 症 例

患者: 43歳, 男性

主訴: 健診の超音波検査による左水腎症

現病歴: 1998年9月30日, 上記にて当科初診

既往歴: 29歳時に経尿道的膀胱腫瘍切除術 (病理所見は不明)

現症: 理学的所見に異常を認めず

初診時検査所見: 尿潜血が1+ である以外は特記事項なし

画像検査および経過: 経静脈的腎盂造影で左水腎症および左尿管の第5腰椎椎体より上の淡く描出される拡張像を認めたが、それより下は描出不良であった (Fig. 1)。CT上、左尿管結石を疑わせる高密度領域を認めたため、左尿管結石として経過を見ていた。その後1年ほど経過しても、無症状であり、経静脈的腎盂造影、CTなどの画像上も変化がみられないため、1999年9月1日に逆行性腎盂造影を試みたが、膀胱鏡



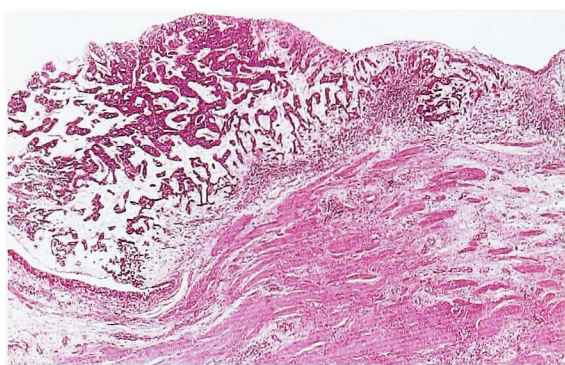
Fig. 1. Excretory urography shows a left hydronephrosis and a blurred image of lower portion of ureter.

にて左尿管口より突出する小隆起を認め、カテーテル挿入を試みるも不可能であった。MRI T2強調像では、左尿管狭窄部に膀胱を前方に軽度圧排する非円周状の低信号な領域を認めたが腫瘍は明らかでなかった (Fig. 2)。以上の所見により、左尿管腫瘍と診断したが、治療法の選択では腎尿管全摘か尿管部分切除かで迷うところとなった。9月21日に左尿管口より突出す

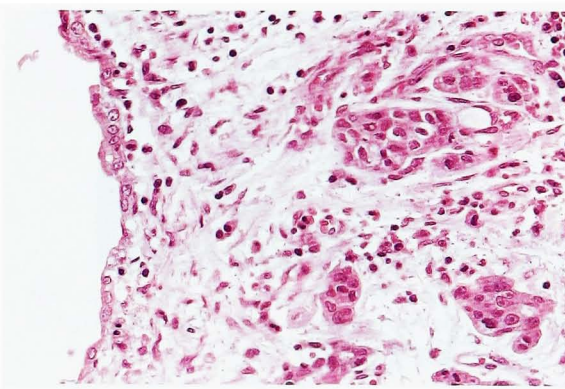


Fig. 2. MR T2-weighted image demonstrates a low intensity area slightly compressing the bladder wall.

る小隆起を組織生検した。標本の病理所見は atypical glandular hyperplasia で、悪性を疑わせる所見は明らかでないため、積極的な腎尿管全摘は回避する方針で臨むこととし、11月2日に左尿管部分切除術を施行した。



a



b

Fig. 3. a: A pedunculated polyp covered with single epithelial layer protruded in the ureteral cavity. It grew into the submucosal layer. H & E, reduced from  $\times 10$ . b: Cells were small and stood in cords. Stromal tissue was homogeneous and edematous, with slight infiltration of lymphocytes. H & E, reduced from  $\times 100$ .



Fig. 4. Excretory urography at 2 months after operation reveals a distinct whole image of the left ureter.

手術所見：左尿管を膀胱内から剝離し、さらに膀胱外側より剝離を進めてゆくと、尿管口より3 cm ほどが固く触知されるため、この部分を約1 cm の余裕をもって切除した。長軸にそって切開すると、白く固い隆起が2/3 周以上に見られた。術前に尿管長の不足による尿管再建術などの必要性が懸案されたが、残存尿管長は十分にあり旧尿管口のやや頭側に新 hiatus を作成する尿管膀胱新吻合が可能であった。吻合後、左尿管、腎盂を造影したところ陰影欠損は認められなかった。

病理組織所見：内方に向かって軽度の異型を有する移行上皮が索状の配列をとり、深部にはリンパ球、形質細胞が浸潤するが、境界は明瞭で浸潤像は認めなかった。尿管に発生した内反性乳頭腫と診断した (Fig. 3)。

術後経過は順調で、術後2カ月のIVPでは、左水腎の残存を認めたが通過は良好であった (Fig. 4)。

## 考 察

本症例は29歳時に経尿道的膀胱腫瘍切除の既往があり、その病理は不明である。万一これが移行上皮癌であったとしても、内反性乳頭腫を発生する前に移行上皮癌の既往があることは珍しくない。Stein ら<sup>1)</sup>は内反性乳頭腫患者の多くに移行上皮癌の既往があり、その内のいくつかは内反性乳頭腫の後に移行上皮癌を発生していると述べている。このことについて、浅野ら<sup>2)</sup>も自験例をまじえ内反性乳頭腫の少なくとも一部は悪性へと変化しうる能力を有すると述べている。また河ら<sup>3)</sup>の調査によれば、上部尿路の内反性増生腫瘍において、悪性所見が見られたとの報告は本邦におい

て11例あり, 良性の報告が諸外国含めて30例ほどしかないことを合わせると, 上部尿路における内反性増生腫瘍に悪性所見の見られる割合は決して少なくない. Kimura ら<sup>4)</sup>も上部尿路の内反性乳頭腫に悪性を合併する率は, 下部尿路の3倍であると述べている.

内反性増生腫瘍は, 表面が正常上皮に覆われることや, 同一腫瘍内に良性悪性の混在する可能性があることから, 術前の細胞診や生検による良性悪性の診断は困難<sup>3)</sup>である. また術中の迅速病理診断は, 凍結切片での移行上皮癌と内反性乳頭腫の鑑別が困難であるため有用でないとの意見もある<sup>3)</sup> 本症例のように尿管部分切除を選択する場合, 診断は術後の病理結果によるしかないのが現状である. 尿管鏡による可及的腫瘍切除が有用であるとの報告<sup>4)</sup>はあるが, 内反性乳頭腫の組織学的特性から, 良悪混在例を完全に否定することは難しいと思われる. 近年, 尿管内反性乳頭腫の核内 DNA 量の測定や PCNA 免疫染色によって尿管内反性乳頭腫の malignant potential を客観的に評価する方法が注目を集めている. 辻村<sup>5)</sup>は膀胱内反性乳頭腫6例のうち, 核内 DNA 測定により aneuploid を示すものが1例のみあり, PCNA 免疫染色で強陽性を示した1例と一致したと述べており, この手法は今後の症例の蓄積により再発率との相関が明らかになれば有力な診断法になりうると思われる.

以上, 述べてきたことより, 尿管内反性乳頭腫の診断および治療法の選択には, その組織学的, 生物学的特性から, 十分に慎重でなければならない. 核内

DNA 測定による malignant potential の客観的な評価などの分子生物学的手法を含め, 新たな診断法と治療法の確立が待たれている.

## 結 語

尿管に発生した内反性乳頭腫を経験した. 上部尿路に発生した内反性乳頭腫の報告例は少なく, 若干の文献的考察を加えて報告した.

## 文 献

- 1) Stein BS, Rosen S and Kendall AR: The association of inverted papilloma and transitional cell carcinoma of the urothelium. *J Urol* **131**: 751-752, 1984
- 2) 浅野晃司, 阿部和弘, 加藤仲樹, ほか: 尿路 Inverted papilloma 35例の臨床的検討. *日泌尿会誌* **90**: 514-520, 1999
- 3) 河 源, 相馬隆人, 渡部 淳, ほか: 内反性増殖を呈した尿管移行上皮癌の1例. *泌尿紀要* **45**: 485-488, 1999
- 4) Kimura G, Tsuboi N, Nakajima H, et al.: Inverted papilloma of the ureter with malignant formation: a case report and review of the literature. *Urol Int* **42**: 30-36, 1987
- 5) 辻村 晃, 高野右嗣, 岡 聖次, ほか: 膀胱 inverted papilloma における増殖能の検討. *日泌尿会誌* **88**: 618-623, 1997

(Received on June 14, 2001)  
(Accepted on November 5, 2001)